

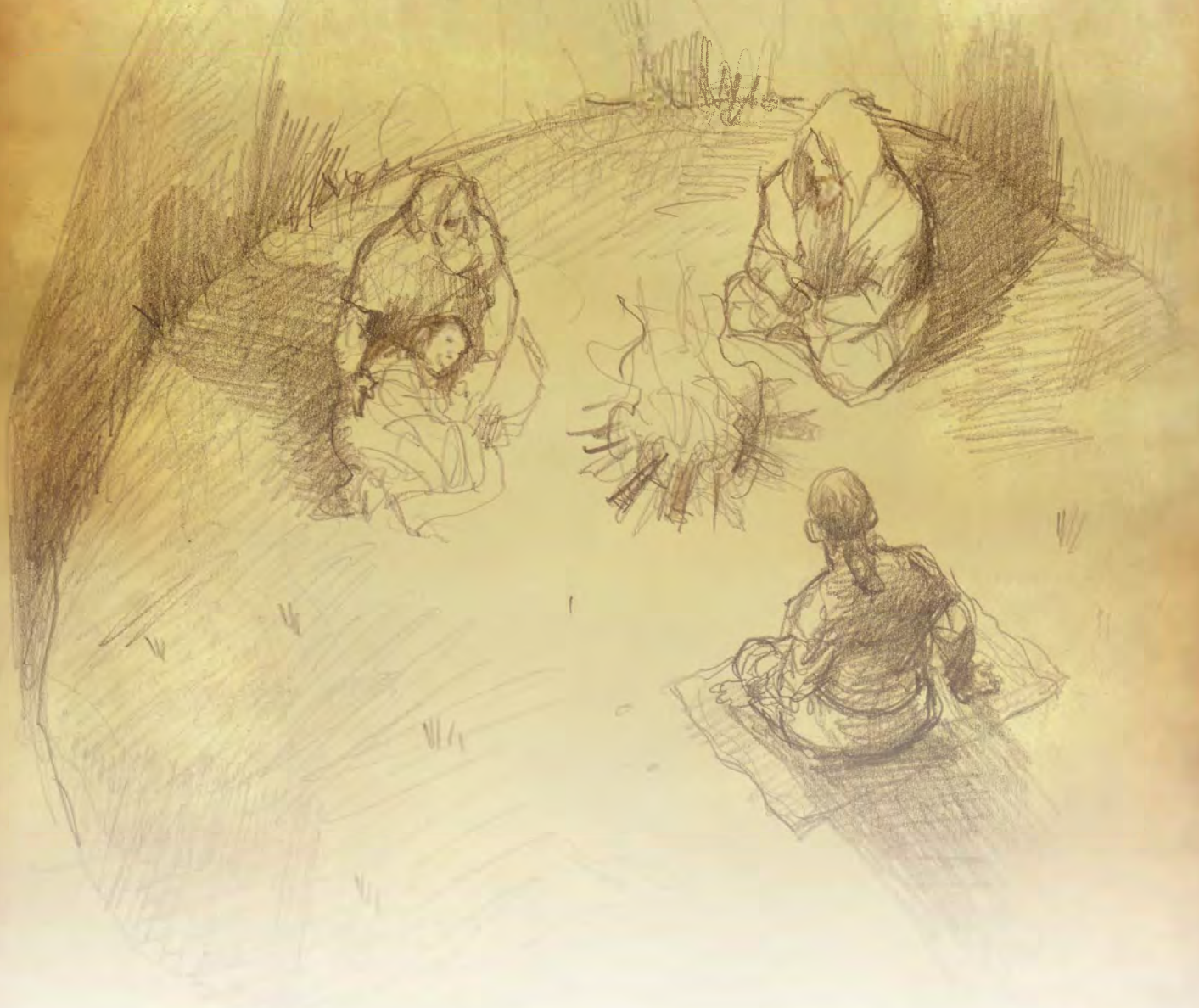
DIE  
LEGENDEN  
VON



# ANDOR

アンドールの伝説

ペーター・グスタフ・バートシャット 作  
ワタリガラスの決断：後篇



**これまでのお話：**ファンと息子のフェンは、アンドール攻めの事前準備として人々の間に紛れこみ、密偵を続けていた。ところがある日たまたま、連絡員であった商人のナデルとの密会を、村娘ネヤに見られてしまう。ファンは息子に、この目撃者を殺せと命じた。ところで彼らは誰のための密偵なのだろう？物語の後半を記す前に、それまでの経緯について見ていくこととしよう。

何年か前、遙かな東方で：ステップの四つの風のうち最も冷たいフレイスが、ゲル（移動式家屋）で形成された野牛族の村を吹き荒れた。冰雪の結晶が、ステップの草原と蛮族の丸いゲルを、粉砂糖のように埋めていく。氏族の騎乗用の大トカゲが数頭、ゲルの風下で微動だにせず立ち尽くす。だがその背も、白い雪の層で薄く覆われていた。もっと気温が下がったら冬眠に入ってしまうだろう。そうなったら最後、何者であろうとも雪解けまで動かすことなどできはしない。

集会用の大きなゲル内なら、中央の大きな焚火から離れすぎなければ、寒さを凌ぐことはできる。炎から数歩、氏族のトーテムたる大きな野牛の像がある。蛮族の言葉で野牛を意味する「イヨーテゲ」と、赤熱の鉄で焼き印された盾が、掛けられている。この盾もまた、長きにわたって忘れ去られた彫刻師の才能を表すものとして、必要不可欠であった。

この集会所には、ゆうに百人が納まる。重要な決断が必要なとき、すなわち戦争、他の氏族との婚姻、吟遊詩人の語りなどの際に使用され、敷き詰められた絨毯いっぱい鈴なりに埋まる。だが今日は、この空間に四人の男しかいない。有力な四酋長のひとりアブゾラク。その従弟で異国や異文化の専門家と目されている交易商ナデル。氏族の内外で追跡者として名高きファン。そしてその最年少の息子フェンは、焚火の暖かさと寄りかかった父の心地よい体温のおかげで半ば眠っていた。

おそらくこれは、今までここで開催されたなかでも、随一に重大な会談だっ

た。だがその内容は極秘であり、アブゾラクはこれ以上の関係者を作りたくなかった。

アブゾラクが王の御前の族長会談から戻ったのは、ほんの数日前。良き知らせはひとつもなかった。数年前、南方へと襲撃をかけた蛮族部隊は、巨人の国へと到達し、何百名もの死者を出す大敗を喫した。巨人のうち何人かは長く忘れられていた黒魔術を会得しており、勝利を確信していた蛮族たちに骸骨剣士をけしかけてきた。

蛮族たちは、南方での略奪に関する興味を急速に失った。逆に巨人どもは、この容易な勝利に味を占めた。以来幾度かに渡って蛮族のステップに進撃し、破壊の爪痕を残し、常に多くの民を奴隷として遙かなる地へと連れ去った。

むろん蛮族は、この敗退から学んだ。軍事力を増強するにあたり、大きな両刃の斧を大幅に製造したのだ。この武器は、剣や槍よりも骸骨剣士に対して効果的であることが証明された。いくら最強の黒魔術で戦場に投入されようとも、骨片になってしまっただけではどうにもならない。敗退を重ねた末、蛮族は骸骨剣士を効率的に粉砕する方法を習得し、巨人のひとりすら死に至らしめた。それでも大局を見るなら、敗戦の色は濃厚と言わざるをえなかった。みずからの居住地と〈巨人の帝国〉と距離をとるためには北上するしかなく、ステップの大部分は放棄された。

王の御前の族長会議が征西を決断したのは、そういうわけであった。そのためにはまず、西の国を攻め落とさなくてはならない。

西方については、交易商からもたらされる断片的な情報しかなかった。肥沃な農地、広大な森林、豊富な水資源。だが難攻不落の城砦を有する王国がある。平地での戦いにおいては蛮族に一日の長があったが、攻城兵器となると高度な魔術と同様まるでわからなかった。

そこで斥候を西に飛ばす必要があるということになった。目立たぬよう人々

にまぎれ、しばし定住し、可能な限り細部にわたる情報を得る必要がある。

「ファンよ、汝に優る適任者など居はしまい」アブゾラクは結論を述べた。

「西に移住するのだ。やつらの仲間として身をやつし、かの地での信頼を勝ち得、定期的に報告を寄こしてくれ」

「オレたちも接触は絶やさないぜ」ナデルが補足した。「毎年お前さんのいる村に交易商として立ち寄って、集めた情報を全部教えてくれりゃいい。西の国に大襲撃をかける準備が整うには数年を要するだろうし。とはいえいざその時が来たら、前みたいに敵の武器や魔法にお手あげだなんていう事態は避けられるさ」

ファンはすぐ肯いた。既に頭の中で計画を立ち上げているのは明白だった。

「家族を連れて行け」まずアブゾラクが提案した。「三人の妻と多くの子供がいる男など、先方に棲みついて疑われなどしまい」

「いや、かみさんはひとりだけがいい」ナデルが異を唱えた。「かのアンドール王国は一夫一婦制だ。どのかみさんを連れていくのか慎重に選ばなきゃならん。しかもアンドールでは男女は平等だ。女も自分で判断するし、極めてうまく武器を扱う者もいる」

アブゾラクは気に入らないといった風に鼻を鳴らした。

ここで初めてファンが口を開いた。「いや、かみさんは誰も連れて行かない。向こうでいずれかの氏族と政略結婚をしたほうがいいだろう。息子らは…まあ、本来の俺に似て荒くれで騒々しい。今回の任務には全く向かない。ただこの幼き末息子のフェンだけを連れて行こう。これくらい若ければ、先方への定住に無理なく適応できるだろう」

「くれぐれも、アンドールの流儀に染まらせないように」ナデルが釘を刺した。「豊かな国での生活は誘惑に満ちておる」

「心配するな。そんなものがこいつに染み渡らぬようビシビシ鍛えてやる」

翌春、ナデルは牛車の荷台を、毛皮、皮革、干し野牛ハムその他のステップの製品を満載にして、ふたりを伴って西方へ旅立った。遠くに〈見張りの森〉の東端が見えてくると、ファンと息子は牛車から降り、あとは徒歩で行くことにした。ナデルはファンに、来年いつどこで会うべきか正確に伝えた。まだ土地勘がない国であるからして、ファンはその位置をしかとはわからなかったが、追跡者としての本能で確実に突き止められる地震があった。

父子が〈南ヶ丘の森〉に到着するまで、数週間を要した。ファンは誰に対しても親切に手助けした。翌年再びナデルがアンドールを訪れた時には、ファンは村外れに建てた小屋で息子と暮らしていた。腕のいい猟師としての名声を打ち立て、ジビエを売って生計を立てていた。最初は個々の農場へ、後には大きな市場で。

それから何年かが過ぎた。ナデルとの毎年の会合に、ファンは必ずフェンを連れて行った。こうしてフェンは、自分がどこから来て何のためにここにいるのか、嫌でも思い出させられるのだった。

やがてフェンはハンサムな少年へと成長した。筋肉質というよりは引き締まった体つきだった。父譲りの狩人と追跡者としての才能を開花させた。フェンが一四歳になると、ファンは旅商人の護衛として働き始めた。あらゆる職業や階級の人々や、ときにはドワーフとともに、国じゅうを縦横無尽に経めぐった。フェンは〈南ヶ丘の森〉に独りで残されることが多くなったが、たくさんの友達ができたので寂しくなどなかった。

フェンが一五歳になると、若い女たちが放っておかなかった。そして愛の喜びを知った。なかでもファンの小屋付近の村のとある乙女と昵懇になった。

〈南ヶ丘の森〉一裕福な木材商のブロンドの娘ネヤ。しかしネヤに目をつけている男子は他に何人もいた。そこでフェンは、父から厳しく教えこまれた体術

や剣術を、何度か振るわねばならなかったのである。ネヤは体を張ってくれるフェンを、より意識しないではいられなかった。フェンがもっと老成していて賢かったなら、ネヤとの結婚など望んではならぬと、自分に警告したかもしれない。けれどフェンは若気の至りで、この初めての恋に心躍り、辺りで最も美しい女の子を恋人と呼べることを、誇らしく思っていたのである。

フェンが一六歳になると、婚約が成立した。ネヤの父親が、二年後のフェンの一八歳の誕生日に婚礼を上げたいと言い出したのだ。ファンはそれを聞いて、やや心を騒がせた。自分もまだ、アンドールで結婚相手を見つけるつもりだったからだ。フェンなら、リートブルク城内やその付近の女性が相応しい。とはいえフェンはそこらじゅうを旅してまわっていたわけだし、長旅から帰ってきて既成事実を突きつけられた形である。

フェンが一七歳になると、父は再び息子連れ、ネダルとの恒例の会合に出席させることにした。この最後の会合が、全てを覆した。せめてネヤが嫉妬を拗らせていなかったなら……

\*

「何を言われたって」フェンは父とナデルに吐露した。「人を殺すなんてあり得ない。断固として断ることにするよ」三発目の平手打ちを予想し、フェンはサイドステップした。

「これが最後通告だ、坊主！」ナデルが命じた。「ずっと待ってなんかられない」

「リートラントを手中に収めることさえできれば、女なんか三人娶ることができるんだぞ」ファンは息子を懐柔しにかかった。

「!" ✂ ✂ !#」猿轡の下で、ネヤがもぐもぐ言った。

ファンとナデルは佩刀に手を回した。

「父さんとは戦いたくない」フェンは宣言した。「でもネヤは殺させない」

「放っておけ、ファン。オレが始末をつけてやる」言いながらナデルは遂に帯から剣を抜き放った。熟練の一撃は風を切って喉元を狙ったが、フェンは受け流し、切っ先は指一本分逸れた。フェンはその刃を払い、次の瞬間、反撃に移っていた。

それでもこの戦いにおいて、フェンの勝利に賭ける者などいなかろう。いくら父に鍛えられ、何度か修羅場をくぐってきたとはいえ、若造が古参兵ふたりを相手にするのだから。ああ、ふたりともだ！ ファンがすぐさま、ナデルに加勢したのだから。

反撃を交わされたフェンは、後じさるしかなかった。ますます早くなるナデルの打撃を、弧を描いて交わしていく。その背後を、父が狙っている。

生きるか死ぬかの瀬戸際。父には慈悲などないということを、フェンは経験的に知っていた。いわく「戦いは相手が死ぬまで終わらない。であるがゆえに慈悲を示すな！」である。

フェンは振りかぶり、つまずくと、ナデルの刃が頬をかすめた。だがそこで、すっと立ちあがった。つまずきは偽の誘いであり、ナデルの突きを右手の刃で跳ねのけ、たまたまのように左手に握っていた父のナイフを、ナデルの胸にしっかりと突き立てた。

フェンは瞬時に振り向く。果たしてファンは既に剣を抜き、胸元めがけて突きかかった。フェンは敢えて受け流さなかった。代わりにサイドステップし、刃を過ぎるに任せ、そこに自分の剣を叩きつけて動きを封じた。ファンは剣を引き抜くために、息子に裏拳を叩きつけた。この動き、フェンはファンから習っており、予想していた。であるがゆえに、逆の手でナイフを突き出し、右の脇腹を貫いた。

\*

「とどめを刺して！ ふたりともよ！」ネヤが叫んだ。



フェンはネヤの猿轡と縛めを解き、そのロープ類を父とナデルの間に合わせの捕縛用として再利用した。見るからに、ふたりは致命傷を免れていた。

「その女を殺せ！」ファンも叫んだ。「今ならまだ間に合う」

「フェアな戦いだっただな」ナデルがうなずいた。「だがその娘を永遠に黙らせる必要がある。それから一緒に戻ってオレたちと暮らすんだ」

「あいつらの喉を掻き切って！」ネヤが命じた。「それからここから逃げ出せば、誰も追っては来られないわ！」

「今すぐその口を閉ざさないと」フェンは激昂している。「全員の望みをすべて叶えてやるからそう思え。少し考えたいんだ。放っておいてくれ！」

「お前が野牛一族の一員であることを忘れるな」ファンが助言する。「同族を殺すことなど、お前にできはしない」

「ふたりともぼくを殺そうとしたくせに？」

「不従順な息子を殺すのは問題ない。特に息子がたくさんいればな」

「何をそんなに言い合ってるの？」ネヤが訊ねた。「刺しちゃえば、それで終わりじゃない？」

「なあ、ネヤ」フェンが返した。「ぼくの君への想いは、今やどんどん熱を失っていく気がしている。きみは血に飢えすぎている」

「認めなさいよ。あなたは結局、この異国人の仲間なのよ。ああ、最初から分かっているべきだった！ 私は心の花を捧げたというのに、こんな結末に……え、待って！ 何をしようというの？」

「もう一回、猿轡をかませるのさ」フェンはそれを有言実行した。

\*

その日の終わりに、フェンは父および婚約者との決別を決断した。

彼らの力も借りつつ、ファンとナデルを何とか牛車の御者台に乗せた。両者



の剣は、後ろの荷車に放り投げたが、父のナイフだけは手元に置いておいた。

「俺たちは戻って来るぞ」ファンが無然として押し黙るなか、ナデルは脅すように警告した。「その暁には……」

「知ってるよ」フェンが答えた。「復讐、血の応酬、殺人。ぼくの好みからは、ほど遠い世界だ。可及的すみやかにナルネ河を渡って、向こう岸まで行ったほうがいいんじゃないか？ そこからステップに戻るんだ。この娘さんは」捕縛され、猿轡で座っているネヤに顔を向けた。「今日の体験を話して回りたくてウズウズしてる」

もはや男たちは、恫喝めいたことを口にしなかった。おそらく次の村で、互いの負傷の治療をするだろう。そしてふたりが賢明なら、なるべく早くアンドールと可能な限りの距離をとろうとするはずだ。

牛車が視界から消えると、フェンはネヤの元に戻った。この反抗的な娘の親指同士を、今まで後ろ手で縛っておいた。これで怪我をすることはないが、みづから猿轡を外すこともできない。全ての縛めを解き、ネヤは自分から数歩離れるのを見守った。

モラーは林床に佇み、ふたりの行動を興味深げに見比べている。

猿轡で抑えこまれていたネヤの言葉と激怒が、すべて溢れ出した。告発は侮蔑に、侮蔑は脅迫へとどンドンエスカレートする。

「せっかく君の命を救ったのに、それがわからないのか？」ネヤが息をつく瞬間をとらえて、フェンは訊ねた。

もちろん、ネヤは理解する気などなかった。「王にじきじきにお目通りを願って、あなたが異国の密偵だと告発するわ。あなたが斬首されるのを見て、大笑いしてやる。ええ嘲笑ってやるわ！」そう吐き捨て、ネヤは誇り高くきびすを返した。黄金色の髪が舞い、夕日に輝き、細いうなじを撫でる風に揺らめいた。そんな姿のネヤに、フェンは新たな美しさを見いだした。

「おいで、モラー。もうここに用はないわ」ネヤはワタリガラスに命じた。

モラーは何かを決めかねているかのように、あちこち跳び跳ねた。ついに翼を広げると舞い上がり、フェンの肩に停まった。「クラー！」確信と共にそう鳴いた。

「これで終わりだというの？」ネヤが非難した。「こんな異邦人の元に行くなんて、どういう風の吹き回し？」

「人の本性を見極めるのかな？」フェンは推測した。

ネヤは傲然と歩みを進め、一度も振り返らずに森のなかへと消えた。

モラーは羽ばたき、肩の上から飛び立った。結局は、ご主人さまの元へ戻るのだろう。そう思った矢先、ワタリガラスは数歩先に降り立った。地面に転がる何か光るものを見つけたようで、より近づいてその観察を始めた。それは、ナデルが混乱のさなかで落としていった角笛だった。今まで誰にも気づかれず、ここにあったのだ。しばしの躊躇のあと、フェンはそれを拾い上げ、帯にしっかりと結びつけた。

「新たな人生を始めるのにふさわしき儲けものだな」フェンはつぶやいた。

「父さんのナイフ、婚約者……いや元婚約者のワタリガラス、そして蛮族の角笛。少なくとも胴着と剣は元からぼくのものだ」

フェンは辺りを見回した。「今度は何だ？」ワタリガラスにというよりは、自分への問いかけだった。しかしモラーは少し先まで飛んで旋回し、フェンがついてくるのまで待つと、満足げに肩まで戻ってきた。

「東へ、ってことか。いいだろう。少なくともすぐには棲んでいた森には戻れない。旅商人の護衛で運を試すのがいいかな。父さんがいなくなったんだから需要はあるはずだ。モラー、君は何を知ってるんだ？ 喋れないのが残念だよ。行く手を先んじて飛んで、丘の向こうや未知の過度の向こうに何が潜んでるのか教えてくれたらなあ」

「喋れるんだけど」モラーが言った。

幸運にも、ちょうど切り株に出くわした。今は腰を下ろし、息を整えなくてはならなかった。

\*

追跡者フェンの若き日の冒険は、これにて一件落着。

この物語が終わって間もなくのこと……潜み棲む森の外の出来事には一切の興味がなく、ただただ歴史の記述にいそしんでいた文書館の守護者が、その後のアンドールの運命を大きく左右する暴力の渦に、いきなり巻き込まれてしまいます。近日公開予定の「第三の射手」。お見逃しなく！

※フェンは四人の『新たなる勇者』のうちのひとりです：

※物語は『封印の宝箱』収録外伝7『蛮族の襲来』に続きます：

